平成 28 年度第 2 回八戸市総合教育会議会議録

開催日時	平成 29 年 2 月 13 日(月) 午後 1 時 30 分	
場　　所	市庁本館 3 階　議会第一委員会室	
構 成 員	八戸市長	小 林　　眞
	教育委員会委員長	武 輪　節 子
	教育委員会委員長職務代行者	簗 瀬　眞知雄
	教育委員会委員	油 川　育 子
	教育委員会委員	大 庭　文 武
	教育委員会教育長	伊 藤　博 章
議　　題	小・中学校の運動部活動（スポーツ）のあり方について	

開会

（小林 眞 市長）

本日は平成 28 年度 第 2 回の会議ということであります。

第 1 回の会議では、学校現場での新聞活用や子どもの貧困問題について、情報共有や良い意見交換ができたと考えております。特に新聞活用につきましては、具体的な事業として動き出しており、総合教育会議開催の意義があったと感じております。

今回のテーマは簡単ではないと思いますけれども、これまで同様、皆さん是非忌憚のない意見をお出しいただいて、市長事務部局と教育委員会の垣根を越えてよりよい教育環境の整備に繋がっていくことができればと思っております。

議題 小・中学校の運動部活動（スポーツ）のあり方について

（小林 眞 市長）

それでは、早速ではありますけれども議題に入らせていただきます。本日の議題は、小中学校の運動部活動、スポーツのあり方についてです。この議題は私から提案をさせていただきました。

学校行事など学校関係者や PTA の方々など、さまざまな方にお会いする際に、少子化で児童生徒が減少し、部活動の選択肢が減っている、あるいは部活動の指導に教職員の皆さんも大変苦労をしているというお話を聞くことが多くなっているように感じております。実際に新聞報道等でも見聞きすることがございます。また、部活動等のスポーツは、子どもたちの心身の成長にとって大きな役割を果たしているものと考えております。

八戸市は氷都として昔からスケートが盛んで、スケート国体も第 1 回の開催以来 12 回も開催しており、これは開催回数がダントツの 1 位です。また最近では、アイスホッケーでは東北フリーブレイズ、サッカーではヴァンラーレ八戸が八戸市をホームにして活躍しています。八戸はもともとスポーツが盛んな街であります。スポーツは活動している人だけではなく、見ている人も周りで関わっている人たちも元気にする力があると思っております。そうしたスポーツに子どもの頃から関わることの出来る環境を確保していくことが重要だと考えておりまして、提案をさせていただきました。

まず、現在の学校現場での部活動の状況について、事務局から説明を聞くことから始めたいと思います。では事務局からお願いします。

（教育委員会 学校教育課 小笠原 徹 課長　資料に基づき説明）

（小林 眞 市長）

事務局から現状、それから他の自治体の例について説明をしていただきました。

今の内容を聞いての感想ですけれど、まず現状がなかなか大変な状況になってるなと感じました。最初の挨拶でも申し上げましたけれども、学校現場からのお話であるとか、PTA の方のお話だとか、子どもから

はまだ直接聞いたわけではないですけれど、実際それを裏付けるような報告だったのではないかなと思います。

一つは小学校と中学校が違うんだなということが分かりました。学習指導要領等には小学校について何の規定もないということだとすると、本来法律上は、学校は関係ないのかもしれないですね。関係ないという言い方は変かもしれません、義務はないのではないか、義務というか、その学校が子どもたちのためにスポーツ活動を必ずしなければならないものではないということのようです。中学校については明確に位置づけが出ている、それについて名古屋とか大阪では、予算をかけてしっかりした仕組みを作っているということが分かりました。しかし、よくよく考えると名古屋も大阪も政令指定都市なんですよね。政令指定都市は義務教育について、県からも教育面での事務が委譲されている、人事もそうなんですよね。そうすると、要はもしかしたら、本来は県がもう少しきちんとやらなければならないかもしれないですね。学習指導要領にそう書いてあって教育だということであれば、県がもっとやらければならない仕事かもしれないとちょっと感じました。今の報告を聞いたうえでの私のちょっとした感想です。

事務局から次の説明をお願いします。

（まちづくり文化スポーツ観光部　スポーツ振興課　村山 博康　次長兼課長　　資料に基づき説明）

（小林 眞　市長）

それでは、ただ今それぞれ説明がありましたけれども、委員の皆さまのご意見をお聞かせいただければと思っております。

（簗瀬 眞知雄　教育委員会委員）

今後の方策等についてはあとで触れたいと思うのですが、まず現状について、考え方を述べたいと思います。

先ほど市長から話があったこととは逆行しているかもしれません。私は小学校においても中学校においても、文化部も含めて部活動の意義は大きいなと思っております。小学校では学習指導要領には定められてはいないとはいえ、教育活動には違いない、いわゆる教科等は教育課程に定められていて必ずやらなければならないのですが、部活はやらなくてもいい、実際、白山台小学校などはやっていないわけです。しかし、私自身は教科等の学習などだけでは得られない大きな意味がある、そういう活動だと思っています。特にすべての子どもたちにとってももちろんなのですが、スポーツとか運動だけではなくて、目標がなかなか持てないとか、なかなか教科で活躍出来ないとか、そういった子どもたちにとっても、一つの目標として頑張ることができるというような、そういった意味もあるのではないかなと思っています。かつて私自身も部活の指導に夢中になってきた方でしたので、そのように感じています。

ただ昔からある課題として、教員の多忙化とかそういった問題があるのですが、市教委でも長時間労働の縮減に関する通知を出していますし、私自身多忙の原因は中学校はちょっと除いておいて、小学校での話なのですが、事務量、いわゆる直接子どもに関係のない事務量が非常に多くなっているということです。直接子どもに触れ合う部活動は、大事な教育活動だと私自身は思っていて、忙しいという原因の中でも、その忙しさを取り除くべきものと、やはり部活動として子どもたちと直接触れ合うのは大事だという考え方もあってもいいのではないかと思っています。

極端に言いましたが、これからはいろんな協力関係でやっていく必要はあると基本的にはそう思っています。また後でこれからの方向について述べたいと思います。

（小林 眞　市長）

直接子どもと関係ない事務が増えているというのは、どのような事務ですか。

（築瀬 眞知雄　教育委員会委員）

例えば、調査です。文科省、県、市教委と下りてくる調査等もあります。そういったものがダブってくるということがあるので、市教委のほうでもダブらないようにそういう調査とか通知類については、省略していく方向にはなっていると事務局からは聞いていますけれども、そういったものの事務量が多いということです。あとは保護者との対応とか、そういった難しさも忙しさの中にはあるかと思います。

小学校の部活動での話ですけれども、教職員がそれで非常に疲れたということは実際にはあるかもしれませんが、別の事務等が多く多忙だと認識しています。

（小林 眞　市長）

はい、わかりました。大庭委員。

（大庭 文武　教育委員会委員）

私も、ずっと部活動の顧問をやってきている中で感じているのは、やはり文化部も含めて部活動というのは、小中学校においてもやはり重要な部分だなと考えております。

特に昨今のような機器を通じた子どもたちの交流、そのような生の人間と接しないで出来あがっていく人間関係などが多くなっていますが、そういうところに一つの危惧感も持っております。それについては部活動あるいはスポーツを通して、生徒同士が、子ども同士が、あるいは先生と子どもが長く付き合える、そこに大きな一つの意味合いがあると考えています。

その中には児童生徒が個々に達成感なり、特に自己肯定感をもっていく場所もあると考えているので、やはり有意義な活動であると感じています。実際の経験としても、担任したクラスの生徒よりも、むしろ部活動を通して交わった生徒の方が、社会に出てからもずっと、生徒同士も、教員と生徒の繋がりも強いなということを感じております。

また、現状等を踏まえてのことですけれども、小学校・中学校に共通して言えるのは、希望する生徒が自分の希望する種目を継続してやれるのかどうか、例えば小学校でやった生徒が中学校に行ってやれるのか、場合によっては、中学校でやった生徒が高校に行ってやれるのか、継続性を確保してあげるということも一つの大きなポイントだろうと考えています。極端な例で言えば、中学生が高校を選択する場合に、高校そのものよりも部活動で高校を選択する、それも一つの選択肢の中にあるわけです。そういうようなことを踏まえると、やはり小中あるいは高校も通した継続性をどう保っていくのか、ということが大事かなと思います。

そういう観点で見ると、資料にもたくさん出てきますように、現在の教諭だけでまかなっていくのはもう限界があるというところですね。従って、私はやはり外部指導者をどういうふうに取り込んでいくのか、そしてそれをどう制度化してしていくのか、それは報酬とかあるいはどこまでの権限といいますか、例えば引率まで外

部指導者の仕事内容に含むとかですね、引率まで含むとかなり大きな問題になってくるかと思いますけれども、どこまでこの外部指導者としての権限があるのか、その辺も今後検討していく必要がある部分かなと考えています。

場合によっては、例にありますように、地区によっては地域の方とかあるいは保護者とかがコーチとかをやってくれるケースもあると思うのですけれども、地域によってはそれもちょっと難しいというところもあるかと思うのです。なかなか地元で探せない、地域で探せない、場合によっては保護者がもし仮に監督やコーチをやった場合、生徒が卒業すると継続出来ない、指導者が継続できないというようなことも出てくる。そのようなことから、可能かどうかは分かりませんけれども、例えば市の体育協会の各専門部、そこに登録制度みたいなものを設けて、外部コーチ・監督として派遣をしてもいいですよというような希望みたいなものがあって、そこに登録してそこから派遣していく、そうすると継続性も出てくるのではないのかなということを感じております。

その場合も謝礼などの問題も出てくるわけですけれども、その辺もどう確保するのかということも問題だなと感じます。取り留めがなくなりましたが以上です。

（小林 眞 市長）

はい、ありがとうございました。では次、武輪委員。

（武輪 節子 教育委員会委員）

私も部活動ということに関して、先ほど簗瀬委員もお話しされていましたが、運動部だけではなく吹奏楽部・合唱部・美術部・技術クラブ等の文化部においても、指導生徒の成長過程の中で心と体の発達には大変大きな役割を果たしてくれる場の一つだと考えております。年齢の異なる集団の仲間、そして担任の先生や学年の先生以外との先生方との関わりなど、人間関係を学ぶ面においても大変大きな要素・側面をもっていると感じておりますので、学校としては義務がないような、教育課程内ではないですが、これまでの長い歴史であったり、経緯の中においても、学校との関係はまだまだ切り離せないと感じております。小学校の部活、中学校の部活、さらに小中との繋がりという形で、それぞれやはり課題はいろいろあると思います。

地域によってもかなり差はあると思います。今の学校教育課からの説明もあったように、新井田小学校、柏崎小学校、轟木小学校、白山台小学校もそうですが、とてもうまくいっている良い例だと思うので、それに習って他の学校もうまくいければいいなと思いますが、なかなかそういかない実情があると思います。指導者の確保の面もそうですし、指導者はいるけれども逆に子どもたちの人数が少なくなっているので、チーム編成が難しいというのもあると思います。そこで、地域を超えてという形になりますが、チーム作りという面では複数校の合同でのチーム作り、クラブ化という形もあると思います。しかし、手続きするにあたっても、教育委員会の手続きが面倒なので、そういうクラブ化を図る方向性はやめましたというふうにならないように、あまり手続きが複雑ではないような形でいければいいのかなと思っております。

小学校の部活動の指導にあたっている方で、もう 16 年も指導されている方からちょっとお話を伺ったのですが、最初は我が子が入りたい部活に指導者がいなくなって廃部の危機があったので、自分が手を挙げて子どもたちのためにやってきたということです。しかし、小学校の場合は特に働いているお母さんたちのためにも子どもたちのためにも、学校の授業が終わって家に帰っても誰もいない場合に、やはりその部活動

のところでの居場所作りというのも、とても重要なところがあるのではないのかという意味で、働いているお母さんたちのためにも子どもたちのためにも、地域のボランティアとして、子どもたちの居場所を作ってあげたいという気持ちで継続しています、とお話しいただきました。そのことによって、逆に子どもたちから元気をもらっていますという嬉しい声もいただいております。このように、子どもの居場所作りという面においてもやはり、制度化ということもありますが、考えていかなければいけないのではないかなと思います。

中学生にとっても、特に自分の居場所というか、学校生活の中においての部活動の位置付けが非常に大きいと思いますので、そこの体制作りというのは必要だと思っております。しかし、昨年 10 月に行われました県の中学校校長会研究協議会八戸大会の議題の一つで、先生方の多忙化ということについて、その部活動ということがあげられており、引率の件に関しても早急な対策が必要というように訴えている意見もあった、という報告も出ておりました。そして、その部活動の先生に関しても、地域や保護者の強い要望があって、学校単独では決断しかねるところという意見もあるということで課題がたくさんあるようです。

あと私から、部活動に関して一つ提案というかお願いしたいことがあります。やはり、これから新しい屋内スケートリンクができるにあたって、地元のスケートという面からすると、スピードスケートについて、もう少し八戸市として取り組むことを強く要望したいなと思います。屋内スケート場ができても、子どもたちが全くスピードスケートに縁がないようであれば、これから屋内スケートリンクを造った意味も薄れてまいりますので、八戸市をあげてスピードスケートを盛り上げていくという意味でも、そこに関しても強く要望したいと思います。

スキージャンプの高梨沙羅さんは大変有名です。伊藤有希さんという方もスキージャンプで何度か優勝しておりますが、お二人の出身の北海道の上川郡下川町というところでは、やはりその土地の風土・環境というのもありますけれども、ご自身のご両親もジャンプの選手だったということもあるのでしょうが、街をあげて子どもたちにジャンプをさせる取り組みをかなり前からやられていて、今その伊藤有希さんが世界で活躍されているということですので、やはりスピードスケートにおいても、八戸市として何かしら対策を立てていったほうがいいのではないのかなと思っております。

（小林 眞　市長）

ありがとうございます。それでは、油川委員。

（油川 育子　教育委員会委員）

これまでの資料をもとにした説明にもありましたけれども、激変するこの社会の中で、学校にも変化というものが求められているのではないかと思います。部活動は大きな意義があると思うのですけれども、私は小学校と中学校に関しては、ちょっと分けて考えてみたいなと思いました。学習指導要領に明示されていないという小学校と、それから学校教育の一環として教育課程との関連がある中学校、というふうなこともありまして小学校と中学校を分けて考えてみました。

今国レベルでは五つの教育革命というものが行われていますけれども、その五つの中で、今回このテーマに即しているのが二つあるのではないかなと思いました。その二つというのは、一つはチーム学校ということ、二つ目が教員の過重労働削減に関することです。今回このテーマを頂戴し、この二つの点に焦点を置いて考えましたけれども、とても良いテーマをいただいたと思っております。詳しいことに関してはまた次でお話させていただきたいと思います。

（小林 眞　市長）

それぞれご意見を頂戴しました。現状等について事務局の説明を受けての感想を含めての意見を話していただきたいと思います。既に提案をいただいた方もありますけれども、また全体の議論を深める中で次の段階のお話であったり、具体的な提案を考えている方もおられるかと思いますが、それはそれでまたお伺いしたいと思います。今までの所で教育長何かありましたらお話しください。

（伊藤 博章　教育長）

私も六つのときから剣道をやってきましたけれども、部活動の意義というのは大変大きいと思っています。苦しいことに耐えるとか、道場とか体育館に入ったときにお辞儀をしたり、つまり礼法とかですね、それから人として守らなければならない規律とか、それから大人と接していろんなことを、つまり座学では学べないようなことを学んできたと思っています。それが選手になっての成績が云々というよりも、人間としての人間性というか社会性というか、そういったものを育むのに大変大きな意義があったということは私自身認めているところです。

ですから、小中学校にとって部活動あるいはクラブ活動等の位置というのは、非常に大きなものがあると考えております。ただ、今皆さんからありましたように、教員の多忙化というのは本当に部活動だけが原因なのかどうか、例えば私どもが30代の頃、20代の頃、じゃあ本当に暇だったのかどうか、あの業務の内容を考えると決して我々も暇でないし、今が極端に忙しいわけではない、ただ多忙感というのはやはり学校に勤務してみるとあるのです。

例えば簗瀬委員が先ほどお話したように調査等、これが学校経営とか学校運営に全く関係のないものではないのですが、非常に最近多いのが、一週間以内に回答して下さいとか、三日以内にパソコンでデータとして回答して下さい、要するにパソコン等で公務が非常に効率的になればなるほど先生方が忙しくなる。やはり500人もいる生徒の調査をするというのは、並大抵な調査ではない、クラスに30人いる生徒の何十クラスもまとめて平均を出して教育委員会に送ったり県に送ったりする、こういう類の仕事が非常に多いのは確かです。

校長先生・教頭先生は子どもがいるところには必ず先生方が付きなさいよと言う、だけれども、私が校長の時に全国でイジメの事案などが発生したので、ある職員朝会で「先生方、子どもがいるところには必ず付きなさい。」と言ったら、職員室にいた男子の教員が私に向かってではなくて、つぶやきのごとく「俺たちいつ子どもと向き合えばいいんだべ。」とつぶやいたのを今でも鮮明に覚えています。要するに、中学校では授業が終わって職員室に帰ってくるのが4時過ぎなのです。それから部活動が始まるのは4時半頃です、ということは子どもと向き合ったりする時間が本当にない、部活動が終わるのは6時半、夏場は7時頃です。

そういうことが要するに、要求するものが非常に高い、子どもと向き合って子どもの悩みをきちんと聞きなさい、だけども部活動もしっかりやって危険のないように見守りなさい、と言われると、どちらに重きを置けばいいのかわからない。管理職としては、そこをきちんと保障してあげる、子どもと向き合う時間を保障してあげるということが非常に大事だと思うのです。これがたまたま教育長という職をいただいて、校務支援システムというのを導入した一番の狙いなのですが、先生方が忙しいからではなくて、今のように子どもの命に関わる事案が日々起きているご時世に、子どもときちんと向き合う時間を学校側がきちんと担保してあげるということが非常に重要だと思うんですね。

同じように、その部活動の重要さも充分分かるのですが、学校としては、結局少子化に伴って生徒あるいは先生の数が減ってくると、自ずと部活動の数を減らしていかなければならない。だから学校では部活動の大切さを重々わかっていながらも、部活動を減らしていかなければならない、保護者からは非常にお叱りのお電話等いただくわけですけれども、このあたりが正直に学校の現状だと思うのです。

部活動が大事なことは分かっているけれども減らさざるを得ない、先生方の負担を少しでも軽減してあげたい。ちなみに校務支援システムは 1 年経つのですが、校長会等のアンケートを聞くと、80％以上が非常にやってくれてよかった、要するに事務的なものが確実に軽減できたという評価をいただいています。2 年後 3 年後、今後これを本当に活用出来るように、これからもっともっと先生方の事務的な仕事を軽減して、子どもと向き合うなり、部活動に向き合うなり、そういう時間を担保してあげたいなというふうに考えています。

（小林 眞 市長）

はい、ありがとうございました。今、教育長の方からも部活の意義というのは非常に高いものがある、ただもしかすると、昔も今もそんなに忙しさは変わっていないのかもしれませんが、その業務の多忙化の流れの中で、もしかすると部活を減らそうという、玉突きのように影響が出ているのかもしれないというお話もいただきました。部活動やスポーツについて議論をする前に、もしかしたら学校現場の事務作業の議論を最初にした方が良かったような気もしないでもないですが、また次回以降ですね。そういった子どもたちではなく、先生方に焦点を当てたような議論もこの場でできればなと、皆さんのお話や簗瀬委員や教育長のお話を聞いて、ふと思いました。

何か教育委員会として、先生方の教育活動をより子どもと向き合うというという形で充実させることが、もし我々が支援することでそういうことに繋がっていくことがあるとすれば、そういうことについても、これは今回の議題ではないのですが、次回以降議題に取り上げてもいいのかなと、お話を伺っている中で思ったところです。

ただ今回は、子どもたちのスポーツ活動に焦点をあてて、一つは子どもたちができるだけ望む形で、自分が取り組もうとしている競技を継続したいということをどうやって叶えていくかということ、それから環境を整えるにあたって、地域の応援だったり、競技団体の応援というのをどのように得ていくか。もしかすると、一つ先ほどの例で熊本県の教育委員会が発表した小学校の運動部活動を社会体育に移行するという、こういう基本方針があるわけなのですが、何かしらそういった基本の方針に繋がるようなことを考える必要があるのかどうか、その辺今後どうするのかということを絞った形でご意見を伺えればと思っています。

名古屋も大阪も、中学校に関してお金をかけてかなりの支援といいますか、指導をしているということからすると、本市でも同じようなことが出来ないわけではないのですけれども、学習指導要領上の差というのは、部活動の大切な重要性とはまた別に、制度的な問題として県に対して物申す上での根拠にはなるような気もしますので、今後どのような形で主張していくかということもありますけれども、ご意見を伺えればと思います。

先ほどの説明で感じたのは、県によって全然違うということですね。これは非常に大きいことで、県によって全然違うということは、私もここで生まれ育っていますので、そういうものだと思っていたのが実は必ずしもそうでない、ということは意外と変えやすい話かもしれない。変えやすいというのは、いろいろ充実した形で取り組める問題かもしれないという感じを持ちましたので、改めて議論を深める形でまたご発言いただければと思います。

（簗瀬 眞知雄 教育委員会委員）

直接、社会体育とかそちらの方に行くかどうか分かりませんが、移行する場合であっても留意しなければならないなと思っていることもあります。小学校の取組で柏崎小学校の取組例が出ているのですが、先ほど武輪委員からもあったように、そういった取組を紹介していくことからまず始める必要があるのではないかと思います。各学校の中でいろいろ悩んでおり、さまざま情報交換をするのだけれども、本当に情報交換が出来ているのではないのです。

私も外部指導者を 5 年間ずっと続けているのですが、柏崎小学校は地域密着型教育を活用して三者で運営していく、要するにそういった学校から切り離すのではなくて、一体ではあるけれども役割分担をしようという考えなのです。ですから先生方が忙しかったら誰か代わってやればいいし、先生方でなければ出来ないこともあるわけです、特に生徒指導上のことなど。「今日この子が悩んでいたよ」とか外部指導者に伝えると、やはりそれを考えてやってくれると思うのです。逆に外部指導者が「今日こういうことがありました先生」とか、そういう情報交換ができるような三者一体の仕組みを、先生方だけに任せるのではなくて、あるいは社会体育だけに任せるのではなくて、学校教育と社会教育を一緒にやればいいのではないか、簡単に言えばそういう考えなのです。

ですから、この柏崎小学校の例などは非常に参考になります。先生方が全くタッチしていないわけではないのです。練習にも来ますし、引率なども手伝ったりします。ただし、主なコーチは外部指導者がやるという住み分けをうまくしてやる。そういったことを紹介していくことが大事かなと思っています。

先週偶然かもしれませんが、柏崎小学校の愛好会という組織が教育委員会の学校教育実践功労者表彰を受けていますが、珍しいことだと思います。各学校ではあまりよく分からないということがあるので、そういった取組例を紹介していくということが非常に大事だと思います。それで、柏崎小学校の取組で大事なのが、外部指導者が全ての権限を持つのではなくて、最終的には学校長と相談して決める。こういったことがあるので教育的歯止めが効く、いわゆる行き過ぎが止められる。そういったことがありますので、あっちだこっちだではなくて、一緒にやろうよという、そういった呼びかけがまずスローガンとして必要ではないか、そのときは地域密着型教育を生かそうとかそういったことが必要かなと思っています。

もう一つは、すみません、大庭委員からも出たのですが、関係団体いわゆる社会教育組織との連携といったことで、先ほどスポーツ少年団の例が出ました。このスポーツ少年団は現在は市内、県もそうなのですが、小学生中心で中学生が少し入っているのですが、本来的には、このスポーツ少年団は小学生・中学生・高校生までを含めるそういった組織なのです。しかし実際はそこまで行っていない。市の場合は、小学校中心なのですが、スポーツ少年団が総合型地域スポーツクラブの青少年グループの核になると、そういったことでクラブを作っていこうという取組も出てくるのではないかと思っています。文科省が進めている総合型地域スポーツクラブがなぜ広がりを見せないかというと無理があるからなのです。ですから、地域単位のスポーツ少年団を核にしてやってみようとか、そういった出来るところからやっていく、これは体育協会に加入していますので、簡単にいえば体育協会が母団体になりますね。そういったところとの連携というのもこれから必要になるのではないのかなと思います。

大阪とかの極端な例は別にして、名古屋とかの例は非常に参考になるのではないかと思いますが、お金が非常にかかるということがありますので、これは市との連携になってくるかと思います。一つ気を付けてや

らなければならないのは、お金が出るとプレッシャーがかかる、競技ですのでプレッシャーはかかるのですが、県内でもよく聞かれるのが、負ければコーチを辞めさせる、こういったことがあってはならない、あくまでも子どもたちのためにお金を出しているのだということでやっていかなければならないのではないかと思います。

（小林 眞 市長）

はい、ありがとうございます。事例を紹介するというのは、悩んでいる学校等があれば、こういう例があると声をかけること。また、名古屋の例が出たわけですけれども、お金が大変かかるということですけれども、先ほどから言っているのは、見ていて本来県がやらなければならない部分ではないかということがあります。結局それを言いつつ、ある程度市でやってやれるところはやっていくという形に落ち着くかもしれません。県に対して言うべきことでもあるのかなという思いです。

（大庭 文武 教育委員会委員）

先ほども先走って外部指導者の確保が難しいということに関連して、そういう対応策作りも必要ではないのかなとお話したのですが、簗瀬委員からもあったように、私も外部指導者を入れて、学校あるいは教員が手を引くという意味で言ったものではありません。どういうことかと言うと、特に専門的な技術を持っている方が指導に入ると、顧問として付いている先生は、何か他のクラスの用事とか生徒の相談とかがあった場合には、そっちに行っていいですよ、技術指導は外部指導者がやりますよ、それで最後の終わりのときに来て、外部指導者の方と打ち合わせをするとか、あるいは翌日の練習の打ち合わせをするとか、そうするとそこに先生方の他の時間の使い方ができてくるということで、全く先生方がノータッチで外部指導者を入れるという意味ではありません。

それからもう一つ関連して言いたいのは、例えば柔道など特殊で危険性を伴う、そういう場合に全く経験のない先生を顧問にお願いするというのは、お願いする側も辛いのです。ただ当てないといけない、顧問がいない状態にはできません。そうでなくても、どんどん少子化の中で部が減っていく、こういう中でやりたい生徒がいる場合に、危険な種目でも何とか先生をつけなければならない、そういう場合もやはり専門的な技能をもっている外部指導者にお願いをしている。試合等のときにはちゃんと顧問も立ち会うという形の外部指導者の導入というのが必要なのではないかと思います。これは野球にしろ、団体種目のサッカーにしろ、やはりちゃんと知識・技術を持った先生が入るというのは、継続性の問題で生徒が伸びて小中学校で鍛えられた生徒がその後も伸びて行く、そういうようなことを考えた場合にやはり考えて行く必要があるのかなと思います。

もう一つ、外部指導者をお願いする場合に、やはり何回も出ているように勝利至上主義ではなくて、子どもたちを育てるのだという意識を持った方にきちんと入っていただきたい。おそらく外部の方が入ると、常時いる先生の指導とは違いますので、意思の疎通は最初はやはりうまく行かないというケースは何回も見てきていました。ところがやはり、子どもたちを育てるのだという意識で、技術だけではなくて、そういう形でやってくださっている外部指導者は何年かかかるかもしれませんけれども、そういう指導者の気持ちが分かった生徒たちは、逆にちゃんとその指導者のところに付いていきます。言い方を変えれば、外部指導者であっても、あの人のところでやりたいという子どもたちが出てきますので、最初は意思疎通のところでうまくいかないかもしれませんが、その方が何年かやっていく中で、それこそ継続ですけれども、その中で生徒自身が

その指導者についていくという方向性も出てくると思います。ですので、その辺も外部指導者を依頼する場合には大事な要素かと思います。やっぱり子どもたちを育てるという意味合いで対応してくれるのをお願いするのがよいと考えております。

（小林 眞 市長）

はい、ありがとうございます。市の体育協会にお願いするにしても、今言ったようなこととか、学校とどう関わってもらうかというあたりについては、しっかり共通認識でやっていくということが必要だと思います。個々の事例で個々で当然やっていくわけですけれども、まず最初にそういう形でお願いするということについて全体的な共通認識をまずは持ってもらうということなのですが、先ほど提案してもらったこともありますけれども、どこまで具体的にお願いするのか、などが重要になるような気がします。

では武輪委員からのお話の前に、先ほどお話いただいたスケートの振興について、まずは事務局から何かありますか。

（まちづくり文化スポーツ観光部 村山 博康 次長兼スポーツ振興課長）

自分の経験から言うと、私も中学校を指導してきた経緯もありますけれども、指導はボランティアなのですよね。商売でやっているわけではないので、やはり練習で指導するなかで、子どもたちとどう向き合って、自分の思っていることを子どもたちにぶつけて、それを吸収してもらう。これが成績に繋がれば一番いいのですけれども、一人の個人としての人間形成の勉強の一つだというのもあります。先ほど体育協会の話がありましたが、学校やスポーツ少年団側の方の受け入れ態勢と、どのようにやってほしいという固まった形があれば、体育協会さんの方にそういう登録制度のような形などいろいろなことをやっていければ一番相互関係がスムーズにいくのかなと思います。

（武輪 節子 教育委員会委員）

現在小学校の教員の先生の中にも、スピードスケートなどを経験した方でかなり指導が出来る方もいらっしゃると思いますが、そういう方々がスケートに特化して時間を作って、そこに入るということも可能なのでしょうか。

（まちづくり文化スポーツ観光部 村山 博康 次長兼スポーツ振興課長）

スピードスケートだけに特化すると、学校の先生方でスピードを専門にやってきた方はほとんどいなくなってしまって、非常に少ないです。今で言うと、南館先生と橋本先生とか本当に若干しかいないものですから、県のスケート連盟や市の協会さんの方と協力しながら、市の方も昨年度から、県の連盟さんがやっていたスピードスケート教室を市が主催でバックアップしながら予算を付けてやっております。生徒数も参加数も非常に増えていまして、競技の方に進む子も若干ですが 2 年間で増えつつあるという状況ですので、屋内スケート場が出来るまでには、もっともっと競技に携わる子どもたちを増やしていきたいなと考えて、これからもやっていきたいと思っています。

（武輪 節子 教育委員会委員）

私自身、今回総合教育会議の中で部活動という大きな枠でテーマをいただいたのですが、以前からスピ

ードスケートに関して何かしら対策を立てなければ、八戸市でスピードスケートの競技をする人口がなくなってしまうという危機感を感じていました。ちょうど良い機会でしたので、スピードスケートにだけ特化して質問させていただいたり、提案をしてしまったのですが、ここにもスポーツ振興課の方もいらっしゃいますし、市長もおりますので、これは課を超えて是非強く提案したいということでは、総合教育会議にこのテーマをいただいて良かったと思っております。

ボランティアという面では、個人にお金を出してとかいうだけではなく、ボランティアはボランティアで非常に良い要素があると思います。ちょっと今話がずれてしまうかもしれないのですが、先ほど簗瀬委員がおっしゃったように、勝たなければいけない、というだけではない面でのボランティアの方の充実という面でも、事故等に関しての保険の部分にはお金を何らかの形で支援はする、ただ、指導者の面に関して、お金の発生という部分では私はあまり賛成しかねると思っております。

（小林 眞 市長）

はい、ありがとうございました。油川委員。

（油川 育子 教育委員会委員）

私は、児童生徒が希望する部活動を組織できるようにするには、どうしたらいいのかなということについて考えてみましたけれども、複数校の合同の運動部活動の推進ということが如何かなと思いました。推進に向けて具体的なことを6点ほど考えてみたのですけれども、まず一つが学校間を移動する場合の安全面の考慮と、それから時間を要する生徒が負担にならないようにするということ、2 点目が競技力が高い生徒のみを集めて強力チームが編成されるということがないように、あくまでも近隣校でのみ認められるべきとすべきであって、勝利主義に陥らないように工夫を作るということ、それから3点目は活動に関して、週に何日かは単独の小学校で練習を行って、ほかの何日かは合同で練習をするなど工夫をする。それから 4 点目が、学校体育大会への引率については、主に指導する顧問が引率することがあっても良いと思います。このことに関して責任の所在を明確にして、そして生徒や保護者にその旨を周知するということが大切かなと思いました。5 点目ですけれども、万が一の事故が発生した場合に備えて、教育委員会が指針を示して適切な指導助言を行うなど、学校間で事故への対応などについて充分な共通理解を図るということも大切だと思いました。そして最後6点目ですけでども、複数校合同の運動活動を可能とするためには、今までも言われています学校体育大会の参加資格の見直しというものが不可欠で、そして急務ではないかなと思いました。

それから外部指導者の促進については、次の五つのことを考えてみました。まず 1 点目は、地方公共団体において外部指導者の活用のための予算上の措置を一層図っていくことが求められるのではないかということです。2 点目は、中学校での外部指導者は、学校教育の一環として部活動をとらえてもらうように研修会などを開催して、そのための経費も補助をしてはいかがでしょうか。3 点目ですけれども、外部指導者のみで指導したり、引率する際の責任の所在を明確に決めるということ。第4点目は、外部指導者本人の事故に備えて保険加入の促進を図るということ。最後 5 点目は、非常勤職員として位置づけることも検討することが必要ではないかなと思いました。以上です。

（小林 眞 市長）

はい、ありがとうございました。外部指導者といいますか、複数校でチームを作る場合においての本当に具体的な提案だと思います。この辺については中体連の皆さんと意見交換しないといけませんよね。そういう話もすごく多いので、総合教育会議で取り上げて議論したということを踏まえて、今言ったような、そもそも基準がなぜあるのか、スポーツごとになぜ違うのかといったあたりを少し聞かせてもらって、それが合理的なものなのかどうかということについて説明して頂く必要が当然あると思います。それはここに来てもらってなにかやるという話ではないので、事務局から正式にそういった部分について、どういう理屈でそうなっているのかという理由をちょっと聞いてもらう、ということにしたいと思いますので、よろしくお願いします。

（簗瀬 眞知雄 教育委員会委員）

スケートの話に触れないわけにはいけないと思いますので私からも。私は、スケート人口というのは、競技でやるというよりは、今身近な存在ではなくなってきているような状況が懸念されるのです。多分スケート靴を買っても、1 年に 1 回履くかどうかですよね。だと買わないと思うのです。そのために、例えば貸しスケート料金を取っているわけですが、そこの貸しスケートをもっと増やして、ある一定の数になるかもしれませんが、貸しスケートを借りるにはお金がかかるとわざわざということもあるので、予算措置をして、市内小学生は全て無料ですよ、どうぞ来て遊んで下さいというふうに、やはりそういった条件整備というのも必要かなと思うのです。いわゆるスケートが競技である前に、私は遊びであるべきだと思っているのです。昔は遊びでした。ですから、どこでも遊べたのですが、今はそのような状況ではないのですが、そういった条件整備がスケートの場合は料金的な問題も含めて必要ではないのかな、そういう条件を緩和してやっていくと、もしかしたら興味を持ってくれる子が増えてくる可能性もあるし、学校にお願いしてスケート教室を是非やって下さいと、市教委も事業としてバス代を出すとかやっていますので、そういったことをどんどん進めていけばいいなと思っています。

もう一つは、この前から市内の小学校のスピードスケート競技会、栃木県との対抗とかさまざま行われているのですが、あそこで主体になっているのは、皆さんご存知かもしれませんが、市内の小学校スピードスケート競技会が 54 回なのですが、全て小学校の体育科教育研究会が主催しているという事実です。先生方が皆で、特に体育の先生方がスピードスケートを盛り上げようと頑張っているということも是非市長も認識していただいて、そういった面でも励ましていただければ意欲も出てくるのではないかなと思って感じていたところです。以上です。

（大庭 文武 教育委員会委員）

今の話に関連して、今簗瀬委員が話したように、まずスケートの底辺を増やしていく、まずは親しむ、それと同時に、小中学校あたりから競技としてやっている生徒たちの活動しやすいような方法を取れないか。具体的にいいますと、例えば一般公開している中で、なんとか競技する生徒たちの練習時間を早めるとか、今ちょっと聞きましたら練習に入れるのは午後 8 時以降ですか、そうすると、これはよく保護者から聞く話で、当然小中だと送り迎えがつきますので、なかなか練習時間に合わせて送り迎えとなると難しいので、競技そのものには入れないという話も聞いたりします、その辺どうなのでしょうか。

（まちづくり文化スポーツ観光部　村山 博康　次長兼スポーツ振興課長）

練習時間は、だいたい一般開放を終わって7時から9時くらいです。朝も営業の前も練習がございます。土・日は結構な子どもが一般開放に来ますが、平日は冬休み以外はそれほど多くないので、一般開放の時間帯から続けて滑って、練習の時間帯も滑っている子どももございます。

今現在、小学生の選手や、選手になりたいという希望がある方に対しては、市で昨年度予算を取りまして、新しい今のスラップスケートの初心者用の靴を個人に 1 年間シーズン通して貸す、サイズが合わなくなったら、また違うものに交換するという形を行っています。それから、非常に高い靴なものですから、今年度からは中学生に上限いくらという形で決めて補助金の支給ということも行っています。

やはりどうしても断念する子どももいるものですから、徐々に増やしていって、氷都八戸を復活したいなと。やはり続けていってほしいという思い、市長の思いもこのあたりにありますので、そういう形でのより良い方法を今後も考えていきたいと思います。

（小林 眞　市長）

長根リンクがオープンする前は、皆盛岡に行っていてバス代とかは個人でやっているんだよね。

（まちづくり文化スポーツ観光部　村山 博康　次長兼スポーツ振興課長）

そうですね。約 3 週間ぐらいの期間は。

（小林 眞　市長）

まあ、裾野を広げるっていうのはまさにおっしゃるとおりで、オランダはもう全国にスケート場があって、子どもからおじいちゃんおばあちゃんまで滑る環境があるっていうので、そこはもうおっしゃる通りであります。

時間もありますけれど、いろいろご意見が出て一つずつ少し整理をした上で、どういう形で八戸市の中で子どもたちのための学校におけるクラブ活動等が充実した形が取れるのか、また事務局の方でまとめて、またお諮りできるかと思います。今日は全体を統括する形で教育長から発言してもらいます。

（伊藤 博章　教育長）

学校部活動が当たり前になっている教育風土の中で、我々は長年学校生活を送ってきたわけですが、全国的に見ると市長の話にもありましたように、実は青森県と熊本県だけなんですね大きく違うのは。熊本は今 30 年度までそこを地域クラブにしていく、従って数年以内には青森県だけが取り残される。そういう意味では非常にタイムリーな時に総合教育会議にこの部活動・クラブ活動の話題が出たなと思います。

簗瀬委員から柏崎小学校の話が出ましたが、実はこれ先日、学校教育実践功労表彰で教育長室でも賞状を贈呈したので、手元に資料もあるのですが、本当によく工夫された愛好会です。ただ小学校で大事なことは、教育課程外といっても、一気に全て地域やスポーツクラブに任せるということには慎重でありたい、柏崎小学校がうまくいったのには、ここの手元にある資料を見ても、平成 25 年から部活動の在り方について見直しを図ることを伝え、数年がかりで今日があるということですので、保護者や地域の方々の理解と協力のもとで、丁寧に進めていくことがやはりこれは基本だと思います。というのは、地域に受け皿がない状況

で保護者や地域に委ねることは、スポーツ活動以外の本来の教育活動の停滞も懸念される。柏崎では数年かけてと言いましたけれども、それはある意味では柏崎だから出来たところもありますし、私の地元であれば地元、要するにその学校の地域に合った形を模索していく努力が必要だろうと思います。

中学校についてですが、中学校は本当に今東京オリンピックを控え、それと伊調選手等の活躍も刺激になってスポーツへの関心は本当に高まりつつあるのです。ご存知のように、いずこの学校も夏の中体連、秋の秋季大会、新人戦ですね、これを一つの目標に頑張っている。ただ中体連が全国組織であり、顧問や大会の時に監督が教職員でなければ原則ダメだということになっており、このあたりが私ども中学校部活動のハードル、これをクリアしていかなければ中体連という組織の中で活動するのにやや障害になっている。

また少子化によって教職員の数も確実に減ってきていますので、各校とも4月の最初の職員会議に校長が一人一人の先生方を呼んだり、あるいは直接先生と話し合って、今年の剣道部を担当してくれないか、野球部を担当してくれないかと、実はお願いをしているのです。この苦労がなかなか校長としても難しい。要するに介護しなければならない方があったり、それから高齢者でご自身の体調があまりよくない、というふうになりますと、理想を言えば、一つの部に二人をつけるのが理想なのです。そうすれば、土曜・日曜どちらか大会があってもお休みできる、ところが、なかなか一人一部というのが現状だろうと思います。ただ幸いなことは、何があるかというと地域密着型教育の取組が定着してきたおかげで、外部の指導者やコーチ等、地域の方々の支援が確実に増えてきているということは、非常に心強いことだなと考えています。

私なりにまとめてみると、今後は合同チームを活用したり、ホッケーとかスケート関係しかないのですが、これを他の部などにももう少し活用していただいて、どの子どもたちも選択できるような環境を作ってあげたい。専門的な競技団体や経験のある地域の方々に、外部指導者として協力していただければ、スポーツ活動や部活動の選択の幅も広がり、最終的には先生方の負担軽減にも繋がっていくということですね。本日はこの市長事務部局と教育委員会との情報交換あるいは情報共有、今後とも積み重ねながら完璧につくってからやりましょうでは手遅れなので、出来るところから実施して、実績を積み重ねながらスポーツ・部活動の環境整備の機運を盛り上げていくことが非常に大事だと思うのです。

今皆さんからスピードスケートの話が出ました。先日、小学校のスピードスケート大会に行きましたけれども、出場している子どもたちが4年生・5年生・6年生で市内10校31名なのです。だから屋内スケート場、日本屈指の屋内スケートリンクが出来る前に、やはりもう一度スケート教室等を復活する。岡崎先生のような、それから、昨日の新聞で見ましたが、保育園の子どもたちをフリーブレイズの選手が指導するスケート教室、そういうのが大きく載っていたのですが、こういう有名な方と言えば大変失礼ですが、その道のエキスパートの方々の指導を受けながら、この氷都八戸を復活していくことが今喫緊の課題だろうなというふうに思っております。

ですから、競技団体とかそれぞれの学校の事情等もあるだろうから、校長会とか中体連ともに、教育委員会が中心になろうかと思いますが、これまでのように話し合いの機会、協議する機会を持ちながら、可能な競技種目、可能な学校から、ある意味ではモデル的に検討・施行していくことが現実的な方策かなと思います。あれもこれもではなくて、具体的にもう来年度あたりから動き出すのがあってもいい。スピードスケートで三年間県でも了解していただけたように、他の部等もこういう出来るところからまず動き出してみるということが一番大事なことなのではないのかというふうに感じました。

以上です。

（小林 眞　市長）

はい、ありがとうございました。時間にもなりました。今日の会議を踏まえて、当初予算編成も終わったので、すぐ何か、というのはこの時期にやると間に合わないので、今お話されたことを少し整理をしてみてください。これは地域によって差もありますし、学校によっても差がありますので、どういった環境・条件にあっても少し前に進めるようなプランというか、そのような案を事務局に考えていただいて、また次回の総合教育会議の中で、また次回は新たなテーマはあると思いますけれど、今日の結果を踏まえてこういうことを考えましたというのをちょっと見せてもらって、予算的なものが必要であれば、できる限り対応していくということだろうと思います。それでよろしいでしょうか。

以上で本日の総合教育会議を閉じたいと思います。ご協力ありがとうございました。

（午後 3 時　閉会）